プログラム名

東京慈恵会医科大学小児科専門研修プログラム

募集定員

１０名

研修期間

３年

プログラムの特徴

小児科医は成長・発達の過程にある小児の診療のため正常小児の成長・発達に関する知識が不可欠で、さらに新生児期から思春期までにわたる疾患に関する幅広い知識が必要です。また、小児科医には“子どもの総合医”としての素養が求められており小児科医として必須の疾患をもれなく経験するのみならず、小児医療のコーディネーターとしてチーム医療に関する能力・問題対応能力・安全管理能力を有し、家族への説明と同意を得る技能を身につける必要があります。本プログラムは上記のような小児科医として修得しなければならない資質を踏まえて“子どもの総合診療を臨床的基盤としてさらにSubspecialtyの知識・技能を修得することによって子どもの総合医を育成する”を基本理念として構築されています。専攻医は日本小児科学会の掲げる「子どもの総合診療医」「育児・健康支援者」「子どもの代弁者」「学識・研究者」「医療のプロフェッショナル」の5つの資質を備えた社会のニーズを満たし社会に貢献する小児科専門医となることを目指していきます。

研修初年度および2年目は、主に専門研修基幹施設（３～４名）および専門研修連携施設（各施設１～２名）において小児科医としての基本的な知識・技能の習得を目指した研修を行うとともに、小児診療の基本を体得させるための教育を行います。専門研修基幹施設である東京慈恵会医科大学附属病院（以下、本院）においては新生児、循環器、血液・腫瘍、先天代謝異常・臨床遺伝、総合診療を中心に研修を行います。さらにNICU・PICUにおいて重症患者管理についても学んでいきます。本院は特定機能病院として高度な専門医療と包括的医療に対応するため各専門領域に経験豊富な指導医やコメディカルスタッフを有しており専門性の高い小児医療を学

ぶことが可能です。小児科一般臨床については専門研修連携施設である東京慈恵会医科大学葛飾医療センター、東京慈恵会医科大学第三病院、東京慈恵会医科大学柏病院、康心会汐見台病院、厚木市立病院、富士市立中央病院、西埼玉中央病院、町田市民病院、愛育病院において研修を行います。これらの施設では小児保健・予防接種・地域医療などの研修も行います。また、専門研修連携施設である埼玉県立小児医療センター新生児科では新生児医療の基礎的研修が可能です。研修3年目では小児科のSubspecialtyの経験も積めるよう本院と小児病院を中心とした専門研修連携施設で研修を行ないます。本プログラムでは先天代謝異常症・臨床遺伝、アレルギー、神経・筋、感染・免疫、血液・腫瘍、新生児、循環器、腎臓・泌尿器、内分泌、消化器、計10領域に関してSubspecialtyの研修が可能です。具体的には先天代謝異常症・臨床遺伝は本院、新生児は本院・埼玉県立小児医療センター未熟児新生児科、アレルギーは相模原病院小児科・都立小児総合医療センターアレルギー科・東京慈恵会医科大学第三病院、感染・免疫は東京慈恵会医科大学柏病院、循環器は本院・埼玉県立小児医療センター循環器科、血液・腫瘍は本院・都立小児総合医療センター血液腫瘍科、腎・泌尿器は埼玉県立小児医療センター腎臓科、神経·筋は埼玉県立小児医療センター神経科、内分泌は埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科、消化器は埼玉県立小児医療センター消化器科において研修します。なお、各専攻医のSubspecialtyは専門研修1年目の終了時に行なわれるガイダンス後にアンケート調査を行い、その結果をもとに各専攻医の希望により決定されます。この時点で未定の場合は専門研修終了時までに適宜、Subspecialtyを決定していきます。以上のSubspecialty研修に加えて障がい児医療や小児在宅医療に関しては関連施設である東京都立北療育医療センターおよび神奈川県総合リハビリテーションセンターにおいて研修を行なうことができます。個人履歴・業績調査の結果をもとにした各専攻医のローテーション履歴・臨床実績・研究業績と本人の将来像を参考にしてローテーションを含む専門研修の方向性を決定していきます。

以上のように本プログラムは基幹施設である本院以外に埼玉県立小児医療センターと東京都立小児総合医療センターの二つの小児高度医療施設と多くの連携施設を有しております。したがって、専攻医は一般臨床から専門性の高い医療ならびに数多くの症例と多彩なカテゴリーの症例を経験でき、かつSubspecialtyの知識・技術も十分に修得できることが本プロブラムの特徴です。さらに東京慈恵会医科大学総合医科学センター遺伝子治療部や国立成育医療研究センター免疫アレルギー・感染研究部、同センター生体防御系内科部免疫科などを中心とした関連施設と連携して臨床的視野に立脚した基礎研究を行うことも可能です。本プログラムの最終目標は連携施設と関連施設を有機的に活用し、患者さんに寄り添う慈愛の心を有する“Patient-Oriented”な、かつ常に患者さんの問題点を考えつつそれを解決しようとする“Science-Oriented”な小児科医の育成です。